３月に急逝した大塚耕平元参院議員を「送る会」国会議員ら別れ惜しむ

名古屋市千種区の覚王山日泰寺で開かれた「大塚耕平を送る会」の様子＝６月４日、筆者撮影

３月２日に 66 歳で亡くなった大塚耕平元参院議員を「送る会」が６月４日、名古屋市千種区の覚王山日泰寺普門閣であった。名古屋市長選敗退の衝撃から１年半余り。生前に親交のあった国会議員や地方議員、地域の人たちが故人との早すぎる別れを惜しんだ。

◆ 国民民主党代表代行など歴任、名古屋市長選落選で「ダメージ」◆

大塚氏は名古屋市出身。愛知県立旭丘高校卒業、早稲田大学大学院博士課程修了（マクロ経済学などの専門分野で博士号取得）後、日本銀行に 17 年間勤めてから 2001 年に参院選愛知選挙区で立候補して初当選。旧民主党政権での内閣府副大臣、厚生労働副大臣、旧民進党代表、国民民主党代表代行などを歴任した後、2024 年の名古屋市長選挙に立候補した。

「送る会」の喪主を務めた妻の真理子さんによれば、地元からの市長選出馬の要請に対し、大塚氏は当初「まだ国政でやらなければならないことがたくさんある」として固辞していた。しかし、何度も要請される中で「名古屋の発展が愛知、日本の発展になる。故郷に恩返しできる最後のチャンス」だと思い至り、出馬を決断したという。

だが、結果は河村たかし前市長の後継をアピールした広沢一郎氏に 13 万票以上の差をつけられて落選。これが大塚氏にとって「非常に大きなダメージとなってしまった」と真理子さんは振り返った。

「送る会」で挨拶する妻の真理子さん＝６月４日、筆者撮影

◆「家族としてはまだ受け止めきれない」と妻・真理子さん◆

市長選投開票日から３カ月も経たないうちに、大塚氏は大動脈解離を発症。一命をとりとめて徐々に快復したが、昨年冬から再び体調が悪化。死去の前日にはゴールデンウィークの旅行について話していたものの、翌日には心不全で帰らぬ人となった。真理子さんは「病気を発症したときも突然。亡くなってしまったこともあまりにも突然で、家族としてはまだ正直、受け止めきれない」と涙ぐみながらも、こう気丈に話した。

「知ってか知らずか、自分の命が 66 歳までしかなかったからこそ、大塚は本当に一生懸命仕事をし、家族とも過ごし、仲間とも過ごし、充実した人生を送ってきたのではないかと思っています。今日はある意味、大塚からの感謝の会。皆さまに『これまで本当にありがとうございました』と伝えたいという会です」

◆ 鳩山元首相ら参列、国民・榛葉幹事長「感謝でいっぱい」◆

葬儀は近親者で執り行ったが、別れを伝えたいという多くの声を受け、後援会を中心に有志で「送る会」が企画された。時間内なら誰でも参加できる自由な会で、平服での参加が呼び掛けられた。会場では大塚氏の生い立ちの年表や、自身で発行したフリーペーパーに掲載された漫画などもパネル展示された。

親交のあった政治家では鳩山由紀夫元首相が参列。「心の温かい、私も大好きな方だった。むしろこれから難しい政治の中でしっかりと国民民主党を立て直してもらいたいと思っていた」としのんだ。

国民民主党の榛葉賀津也幹事長は国会議員として大塚氏と同期で、「市長選に出るというときも相談され、夜に一緒に飲んだ。『ふるさとのために頑張る』と言っていたので背中を押した」と思い出を語った。

大塚氏の「偏らない、正直で現実的な政治」というキャッチフレーズが国民民主党のバックボーンになったと明かし、「（国会で）席がずっと隣同士だったので『榛葉ちゃん、与党になんなきゃダメだよね』『野党から変わっていこう』という話をした。『対決より解決』というキャッチフレーズで我々はやっているけれど、これも大塚さんの生きざまそのもの。それを具現化できるように頑張っていきたい。大塚さんには感謝の気持ちでいっぱい」と冥福を祈っていた。

「送る会」は 22 日に東京でも開かれた。

参列した鳩山由紀夫元首相＝６月４日、筆者撮影

大塚氏との思い出を語る国民民主党の榛葉賀津也幹事長＝６月４日、筆者撮影

関口威人（せきぐち・たけと）1973 年、横浜市生まれ。中日新聞記者を経て 2008 年からフリー。2018 年に一般社団法人なごやメディア研究会を設立、代表理事に就任。本誌のほか、東洋経済やヤフーなどに記事を執筆している。